

「性的モノ化」再訪

江口聡

京都生命倫理研究会

2018/3/24

Some of them want to use you, Some of them want to get used by you.
— Eurythmics, “Sweet Dreams”

Just keep on using me, until you use me up. — Bill Withers, “Use Me”

「性的モノ化」は1970年代以降の第二派フェミニズムの中心的な概念の一つで、性犯罪、セクハラ、売買春、ポルノ^{*1}、美人コンテスト、各種の性の商品化など、フェミニズムがとりあげた数多くの「女性」問題において、男性中心的社会慣行（家父長制）における女性の隷属的地位を説明する概念として、いまだに頻繁に用いられており、また哲学的な討議も続けられている (Papadaki, 2015)。この性的モノ化の問題は12年前の本研究会発表および拙論であつかった (江口, 2006)。前回この問題を取りあげたのは、「セックスの哲学」の問題領域と興味深さを示すためであつたが、その後この「モノ化」の問題はますます哲学者たちの関心をひくと同時に性の商品化が盛んになっている現代社会で一般の興味をひくようになってきているために、再度考察してみたい。

1 前回の復習：人をモノとして扱う

「モノ化」(objectification)とは、人間、人(person)をモノ(thing)として扱うこと、またモノとして見ることである。男性中心社会では女性は皆モノ(object)として人間(男性)以下のものとされる。そしてモノ化は危害であるか、あるいは危害とはいえなくとも不道德な行為である。

この「モノ化」の語の広範な使用についてもっとも強い影響力をもったのは、法学者・哲学者のキャサリン・マッキノンだろう。ポルノや性暴力、(なんらかの意味で強制的な)売買春、強制的結婚などが女性を非人間化しているという論点は60年代後半からの第二派フェミニズムの共通の理解であり、マッキノン一人の功績とはいえない。しかし、1970年代のセクハラ告発と法的整備に多大な貢献をしたマッキノンらが、1980年代におこなったポルノ規制運動はフェミニズム内部でも大きな論争的となり、マッキノンの著作はその後のフェミニズム理論の一つの強力な基盤でありつづけている(特にMacKinnon, 1987, 1989)。

もっとも有名なのは、前回もとりあげたマッキノンの次のフレーズだろう。

魚が水のなかで生きているように、すべての女性は性的モノ化のなかで生きている。……女性はみな、

^{*1} 本論では「ポルノ」を、性的な興奮や興味の満足を目的として制作または使用される表現物、といった程度の語として用いる。マッキノンらのフェミニストが批判する、性差別とされる「ポルノグラフィー」は、含意を明確にするため、はっきり「性差別的ポルノ」「暴力的ポルノ」等と表現する。

四六時中、性的虐待の影で暮らしているのだ。(MacKinnon, 1989, p.124)

フェミニズム思想におけるモノ化の問題は、人をモノとして扱うことと、人をモノとして見る（あるいは「捉える」）こと、の二つの問題が同時に議論されているのが特徴である*2*3。女性のモノ化の問題は、結局は女性の見方・捉え方の問題なのだが、ここではまず二つを分離しておこう。なぜならば、もし「モノ化」がなんらかの意味で危害 harm であるとしても、人あるいは人体をモノとして扱いなんらかの損害や操作を加えることと、見ること、考えることとの間には危害の質や深刻さには大きな違いがあると考えられるからだ。そしてその（主張されている）危害の質や深刻さは、道徳的には大きな違いであるはずで、たとえばもし、人を殴ることと殴りたいと思うことには道徳的に違いがないと主張するのであれば、そうした意見を持つ側がなにかを立証しなければならぬからだ。

さて、人間を単なるモノとして扱うこと、単なるモノと同等に扱うことが道徳的に問題があり、多くの場合に不道徳であると説明することはさほど難しくない。人は紙のように切り刻むべきではないし、妻や夫や子供を30万円で友達に譲りわたすべきでもない。典型的には、奴隷や強制労働は人間の意思や感情を無視し、単なる道具として扱うことであり、モノや動物*4と同様に扱うことである。モノや動物と同じようにあつかうとは、意思や自律を尊重しないことであるだろうし、奴隷のように所有や売買の対象になると考えたり、持ち主のきまぐれによって傷つけてもよい、と考えることでもあるかもしれない。

前論文で指摘したように、こうした（生身の）人間をモノとして扱うことが不道徳であるとする見方は、典型的にはカントに由来する。前回紹介したように『道徳形而上学の基礎づけ』での「あなたは、あなた自身においてであれ他者の人格においてであれ、人間性を常に同時に目的として扱い、決して単なる手段として扱わないようにせよ」は有名である。このカント的なアイデアは、多くのフェミニスト哲学者たちによって援用されている*5。

マーサ・ヌスバウムもこのカント的な発想を受けついでいる。彼女は、性の商品化やポルノを巡るフェミニスト的議論で用いられる「性的モノ化」という語が多義的であることを認め、そうしたアイデアに含まれる意味として、道具性、自律性の否定、不活性、代替可能性、侵犯許容性、所有可能性、主観性の否定の七つを挙げている (Nussbaum, 1995; 江口, 2006)。

- (1) 道具性 (instrumentality)。人をある目的のための手段あるいは道具として使う。
- (2) 自律性の否定 (denial of autonomy)。人が自律的であること、自己決定能力を持つことを否定する。
- (3) 不活性 (inertness)。人に自発的な行為者性 (agency) や能動性 (activity) を認めない。
- (4) 代替可能性 (fungibility)。人を (a) 同じタイプの別のもの、あるいは (b) 別のタイプのものと交換可能であるとみなす。
- (5) 毀損侵入許容性 (violability)。人を境界統合性 (boundary-integrity) を持たないものとみなし、傷つけたり侵入してもよいものとみなす。
- (6) 所有可能性 (ownership)。人を、他の誰かが所有し売買できるものとみなす。
- (7) 主観性の否定 (denial of subjectivity)。その人の主観的経験や感情を配慮する必要がないと考える。

*2 マッキノンには発想と問題意識は非常に鋭いものの、かなり難解な「哲学的」な思考と記述の傾向があり明晰とはいえない。この「モノ化」objectificationにおける object が、「対象」であるのか、「物体」であるのかの区別も明確ではない。以下のように object が対象あるいは目的語であることを示唆するような文章も存在する。“Men fuck Women. Subject verb object. Period.” (MacKinnon, 1989, p.124)

*3 正確には、生身の人間を扱うことが見ることに他に連想によって拡張されている。

*4 動物にさまざまな強制をおこなうことが道徳的に問題がないと主張するつもりは毛頭ない。

*5 Eva Kittay, Hill (1987) など、カントを知るほとんどすべての論者に用いられているといつてよい。

これらの「モノ化」の複数の意味は重なりあうところもありそれぞれ興味深いのだが、ヌスバウムの主要な論点は、性暴力や性差別的ポルノで問題になる「モノ化」の問題の中心となっているのは(1)の「道具性」、すなわち他人を単なる道具として扱うことであるというところにある。

ただし我々の実生活においては他者をモノとして扱うことは避けられない。また時には他人を魅力的で快適なモノとして扱い、またそうしたものとして扱われることがワンダフルでもありえるとヌスバウムは認める。たとえば、モノとしての自分の身体を褒められることは、親密な関係のなかでならむしろウェルカムなことである。身体を使い、使われることも時には快適である^{*6}。セックスはそうした営みの典型であって、成功すればワンダフルなモノ化となりうる。他人の道具としての使用の成功の条件は、ヌスバウムが考えるところでは、相互配慮的で持続的な関係のなかでの包括的な同意が存在すると考えられる場合である。問題があるのは「モノ化」が一方的な場合である。こうした考え方は一般にも受け入れやすいものであろう。

ところがヌスバウムは、一部の人が営む、同意の上の短期的で無差別に近い性的関係（カジュアルセックス）には一定の道徳的懸念を感じると告白するが、その正当化は果たしていない。なぜその場での同意・合意によってお互いを使用するだけでことに問題があるのだろうか。当人の意思と自律を尊重し、主観性に配慮すれば、つまり十分な配慮と同意にもとづくとするならば、他人を代替可能な道具として扱うことそのものには道徳的問題はさほど存在しないのではないだろうか。持続的な愛着関係を重視するヌスバウムの立場は、彼女の単なる選好を表明しているだけなのではないかという疑問が残る。そしてヌスバウムに賛成したくなる我々は、単に我々はそうした人間関係あるいはセックス関係が理想的だという選好をもっているだけかもしれない。

2 人をモノとして見る

とりあえず、ヌスバウムの論文は、マッキノンらのポルノ批判の文脈の上のものではありながら、人をモノとして扱うことの問題点を考察したものだ。ポルノ的視線、たとえば女性テニス選手を性的に見るPlayboy誌、といった事例もとりあげられているが、これは当人が望まないであろう描写という論点に留まっており、十分に展開されているわけではない。

しかしもとのマッキノンらのモノ化批判は、人をモノとして扱うだけでなく、(特に)女性をモノとして見る、モノとして捉える(conceive)する態度と、そのポルノ的享楽、そしてそれを許容する社会的規範・態度に対するものであって、問題はずっと面倒である。冒頭で引用したマッキノンのフレーズは、誰かが個別の人間をモノ化し使用するという問題を指摘しているのではない。そうではなく、すべての女性が、常に男性中心社会で性的なモノとされつつ生活しており、そうした視線が、各種の性的虐待の背景になっている、と指摘していると解釈するべきだろう。フェミニストにとっての問題は、単に人をモノ化することではなく、女性一般がモノ化されていることなのである。

ヌスバウムの下世代のレイ・ラングトン^{*7}はヌスバウムの7つに、さらに次の3つを加えている(Langton, 2009, pp. 227-229)。

(8) 身体への還元(reduction to body)

(9) 容姿・見かけへの還元(reduction to appearance)

^{*6} たとえば、昼寝のために、本人の同意なしに、高名な大学教授のお腹を枕にしたりされたりする。

^{*7} ラングトンは言語哲学が専門でマッキノンの発想を言語行為論の文脈で解釈しなおす一連の作業を行っている。別の拙論で紹介と批判を行なっている(江口, 2007, 2010)。

(10) 消音 (silencing)

(8)の身体への還元はわかりやすいだろう。女性をその性的な部位に代表させてしまう傾向である。これはSNSでもよく見うけられる女性の不満であるし、現実の男性の会話においてもこうした表現は珍しくないかもしれない*8。たとえば、マッキノンらと並んで、90年代に反ポルノ論陣で活躍した社会学者のダイアナ・ラッセルは次のように言う。

ポルノのもう一つの特徴は、性的モノ化である。これが意味するのは、人間を——通常は女性を——男性と同等の権利に備する多面的な人間としてではなく、tits や cunt や ass として、非人格的な物体 (thing) として描きだすのである。(Russel, 1993, p.6)

単に女性の身体というだけではなく、美しい身体への賞賛や、そうでない身体への蔑視を含むものが(9)の容姿への還元である。ルッキズムあるいはルッキシズムと呼ばれる態度である。これはラングトン自身の文章を紹介しよう。

人が、他人をモノのように見ることがある。彼女を、責任能力に欠けているだけでなく、その見かけ以上のものは存在しないかのように、彼女がどういう見かけか、感覚にどのように現われるか以外には存在しないかのように見ることがある。人が、他の人を、その身体以上には、目と唇と顔と胸と腰と脚のお手軽なパッケージ以上のものではないかのように見ることがある。(Langton, 2009)

(10)の消音^{サイレンシング}*9は、女性の意見や発言を聞かなくてもよいことと考えること、または音声や文としては意識されても、それを文字通りのメッセージと受けとる必要がないと考えることである。「女のノーはイエスだ」というような(社会に存在していると言われている)通念については別論(江口, 2007, 2016)を参照してほしい。

たしかにいずれも女性を感じやすい非常に不快な社会的圧力であり、その不快さを共有する女性が多いはずである。結局のところ、こうしたモノ化の問題は、ヌスバウムが議論の中心とした道具化だけの問題ではなく、より広く、男性が性的に能動的な主体であり、女性が性的な行為をされる受動的な客体(object)であるということ*10、女性が性的に魅力的な(あるいはさほど魅力的でない)鑑賞の対象(object)とされているということ、男性が主体であり女性が対象であるということ、そして性的な対象とされることは、女性にとって人以下の存在と見なされることだ、と捉えた方がよいだろう。これは(主に)女性の実感の問題なのである*11。

ラングトンと並び影響力のあるハスランガーは、マッキンノンの発想を次のように表現する。

あるひとが何か(あるいは誰か)をモノ化するとは、それを、自分の欲求の満足のための対象として眺め扱うことである。しかしこれだけではない。というのは、モノ化として考えられているのは、自分の見方を強制実現するときにもっている支配関係だからである。モノ化は「頭のなかで」だけ起こるものではない。それは、欲望の対象上で現実化され、身体化され、押しつけられるのである。したがって、ある人がなにかをモノ化するとき、それはその人がそれを自分の欲望を満足させてくれるなにかと見るだけでなく、それがもっていてほしいと欲望する属性を持たせる力をもつということでもある。モノ化する者たちは、必要があるときには——つまり、その対象が欲望している属性を欠いているときには——、自分が欲望している属性をその対象がもつようにする権力を行使するのである。(Haslanger,

*8 私自身は実際には聞いたことがない。

*9 うまい訳語が思いつかない。

*10 “Men fuck Women. Subject verb object. Period.” (MacKinnon, 1989, p.124)

*11 ここでの「女性」が誰であるのかという問題は実は興味深い問題であるが、ここでは論じない。

2012, pp. 64-65)

こうしたいわゆる「社会構築主義」的な思考に私自身はついて行くことができないのだが^{*12}、マッノン以降のフェミニズム全体の問題意識には、男性優位主義的な文化や言語と、男性の性的な視線、そしてその象徴としてのポルノが、女性を劣位に追いこみ、それが女性に対する性暴力と苦しい生活の原因になっている、という意識がある。

3 モノ化は一方的か、そして危害か

さて、モノ化批判の議論は一見説得力をもっているように思われているようだが、疑問は少なくない。

まず、こうした立場のフェミニストたちが想定している文化（ここではポルノ的視線の文化）と、現実の女性たちに対する性暴力や性差別の関係はそれほどあきらかだろうか。上のハスランガーの文章を素直に読めば、男性の欲望と視線には神秘的で魔術的な権力があり、魅力的でない人の上にもなんらかの属性（性的魅力？）を押しつけることができる。本当だろうか？それはどのようにして実証なり検証なりが可能なのだろうか。私には理解しがたい。

もっと事実と照らしあわせることができれば望ましい。たとえば、ポルノの生産や消費と性犯罪や性暴力のあいだになんらかの実証的な関係、可能であれば因果的な関係があることを示すことである。たとえばポルノをよく見る人々は性暴力をふるう傾向があるとか、ポルノ消費が盛んな地域では性犯罪が多いなどのデータを示すことができれば、上のような議論も裏づけをもつことになる。これはかなり長い論争がおこなわれているテーマであるが、残念ながらそうしたデータは今のところ見つかっていないか、あるいは逆の相関がある（ポルノが手に入りやすい地域ほど性犯罪は少ない）と私自身は判断している (Diamond, 2009)。実はこうした、我々の一般的な経験や、より実証的な調査との乖離がモノ化批判の議論で気になる点である。

また、この基本的に男女で生じるとされるモノ化は、フェミニストたちが想定しているほど一方的なものだろうか。80年代以降、フェミニズムに対する反動的な思想運動も存在する。これらの論者はしばしばフェミニズムや政治的な正しさ(PC)に敵対的で、特に冷笑的であり、SNSはともかく学者世界で人気が出るようなものではないかもしれないが、モノ化の問題を考えると避けて通ることはできない。通俗的に見えるかもしれないが、「モノ化」の論点のいくつかをそうした視点から見直してみよう。

3.1 手段として

(1) まず道具化から見てみよう。他人を単なる手段として扱うことはたしかに不道德である。しかし、単なる手段としてではなく、常に同時に目的として——解釈は難しいが、本人の意思と目的を尊重して——扱う場合にはさほど道徳的に問題ではないことはヌสบアウムのような論者も認める。さて、女性が男性を（常に同時に目的として）性的な満足的手段として使用することはどれほどあるだろうか。たしかに性的な関心から男性を使用すること必要は相対的にはまれと言えるかもしれないが（それさえも怪しいが）、他の目的のため——経済的な生活の安定、精神的な安定、同性との競争、生殖その他——のための手段として同性や異性を扱うことがまったくないという女性がどれほどいるだろうか。

アリストテレスの『ニコマコス倫理学』での友愛論では、人々の交際の理由は主に三つである。快楽か、有用性か、美徳か。高級な人々は互いの美徳のために、その美徳の達成を願うあう関係をもつことができるが、

^{*12} 「社会構築主義」的な立場をとる論者への違和感は江口(2017)で表明しておいた。

一般の人々は快楽や有用性のために交際するものであり、また快楽と有用性を交換する関係もごく一般的なものである。美德のために交際することが他者を道具化することであるとは言いにくいかもしれないが、快楽や有用性ゆえの交際は、少なくとも他者を自分の目的のための手段として用いることを含んでいるように思われる。むしろ、なんの快も有用性ももらさない関係、はアリストテレスたちにとっては考えにくいものだったろう。

レスリー・グリーンは、社会的動物である我々は他人を手段として「使用」することなしにまともに生活を送ることはできないことを指摘したのちに、次のように言う。

ほとんどの人は、絶望的なまでに他人の役に立ちたいと欲している¹³のであり、また人が自分自身を理解するのは、そうして、潜在的にせよ現実的にせよ、他人に使ってもらうことによってなのである。もちろん、彼らは使われることだけを欲するのではないし、またある制約にもとづいて使ってほしいと思っている。しかし、自分がなにかの役に立つという思いは大事なものだ。人が老いたとき、あるいは深刻な障害を負ってしまったとき、あるいは長期間失業しているときに本当に問題になるのは、自分がもうもはや役に立つことはないかもしれないという恐怖なのだ。他の人はもう自分を欲しがらないかもしれない、なにかの役目を果たすことができないかもしれない、と。

たしかに我々はモノとしての身体をもった存在であり、使用され、場合によっては性的に注目されることを欲する存在なのだ。ヌスバウムがワンダフルなモノ化・道具化がありうると考えたのは、まさに自分が他人に性的な快を与えるという道具になりうるという自覚と自己理解のためである。彼女の愛好する『チャタレー夫人』でコニーとオリバーはそうした経験をしている。とすれば、道徳的に問題なのは、やはり当人の意思の無視や強制であり、性的なモノとして使用することそれ自体ではない。

3.2 所有物として

(6)の所有可能性はどうだろうか。「俺の女」やいわゆる現代日本の学生^{ソクバク}の言う「束縛」はまさに相手を所有しているという感覚の表明だろう。私は実際にはそうした表現が実際の所有関係を表明しているとは思えないが、男女差がどの程度のものかはわからない。マッキノンも「男の相手 (man's other) であることは、すなわち彼のモノ (thing) になることなのだ」と見ている (MacKinnon, 1989, p.124)。たしかに社会的な規範は女性に男性の所有物であることを期待するように思われるし、またその規範に違反した場合の罰則も重い。たしかにここには性差別がある。

ただし実際の調査を見れば、人間はさほどモノガミー (一夫一婦) 的ではない¹³。すなわち性的な意味では所有物にはなっていない。モノガミー的ではないというのは、一夫多妻、一人の男性が多くの女性を所有するという意味ではない。たとえば、米国では20~40%の既婚男性、20~25%の既婚女性が不倫経験をもち、デート関係のカップルの70%が浮気を報告し、60%の男性、53%の女性が mate poaching (「略奪」)を試みたことがある、といった調査が存在する (Fisher, 2011, 2016; Barash and Lipton, 2009, 2001)。国内の調査で男女の違いはさほどない¹⁴。「所有」に関する社会的で表面的な規範や通念はどうあれ、実際には人々はお互いに所有されていないように思われる¹⁵。社会規範がどうあれ、実際には一部の男女は時間差複婚と隠れ不倫を

¹³ ここで一夫一婦/モノガミーと表現しているのは、法的制度としての結婚ではなく、男女の性的に親密な関係である。

¹⁴ 相模ゴム「ニッポンのセックス」、2013、<https://sagami-gomu.co.jp/project/nipponnosex/>。すこし古いだがNHKの調査もある (NHK「日本人の性」プロジェクト, 2002)。

¹⁵ これは女性解放・第二派フェミニズム以降の時代だからこのような結果になっているわけではなさそうである。

おこなっているようである。ここでポイントは、たしかに男女の「所有」意識と、それに反する浮気や不倫に関する社会的な規範はたしかに性差別的であるが、実際には人々はそれにさほど従っていない、というところにある。フェミニストらの主張によれば、男性支配的な文化とその規範のために女性はモノ化され所有されているはずであるのに、実際にはそうなっていない、ということが重要なのだ。端的に言って、われわれの一部は男女ともに、社会的な規範にはさほどしたがっていないのである*16。

3.3 境界統合性と主観的経験の尊重

(5) 毀損侵入可能性、つまり、他人の空間的・身体的な領域に勝手に侵入してもかまわないという発想は当然道徳的に否定されるべきである。われわれはすぐに痴漢セクハラ強姦といった性的事件を連想できるし、その不快さには共感しやすいものである。男性よりも女性がそうした意味で「モノ化」され被害を受けやすいと認めてよいだろう。しかし、子供のころからの身体的な接触と暴力一般を考えた場合にもそうだろうか？ 男子は子供のころから先輩や同輩から殴られ、触られ、成人になっても無遠慮に触られ、境界統合性をもたないものと考えられてはいないだろうか。これと似たところがあるのが、(7) 主観性の否定である。われわれの社会では、女性の感覚や感情が無視されていると言われるが、それに対応する男性の感覚や感情はそれほど重視されているだろうか。一般の女性はデリケートでありさまざまな配慮をしなければならないが、男性はがきつで鈍感なものであり、その内的な感覚を推測する必要はないと考えられていないだろうか。(10) サイレンシングについても同様である。男性の声は聞かれているだろうか？ さまざまなメディアを見れば、たとえば若い女性や子育て中の女性が何を不満に思っているかという情報はメディアに氾濫しているのに対して、中学生男子が何を感じているかということが注目を浴びることはあるだろうか？*17

3.4 ルッキズム

(8)(9) の身体重視や容姿重視はどうだろうか。配偶者選択において男性の方が異性の容姿を重視することは知られているが、知性や気立てのよさ、貞節といった特質もそれ以上に重視される。短期的な選択(つまりカジュアルセックス)においては知性や貞節の価値は下がり相対的に容姿が重視されるようになる。女性の若さは男性にとって非常に大きな要因だが、同様に女性にとっては経済力がそれ以上に重要である。しかし女性も短期的な配偶戦略においては容姿にかなりの重きを置いている (Miller, 2001; Meston and Buss, 2009; 麻生, 2010)。さきあげたアリストテレス的な交際では(そしてプラトンの交際でも)、美・快と有用性が交換される。男性に経済力や学歴や地位や知識や身長や運動能力を求める女性は少なくないように思われるし、また各種の女性向けストーリーもそのように作られているように見える。そうした好みにも道徳的な問題があるとするれば、我々はいったいなにを求めるべきなのだろうか。

3.5 どれでも同じ？

また、ポルノ的な表現においては女性(や男性)が代替可能なモノとして、その特質を奪われ単なる性的な存在に貶められている、という論点を考えよう。これは我々の事実だろうか？

*16 藤田(2016)は結婚とは相手を文字通り所有することだと信じられておりその信念は脱構築されるべきだと主張しているが、そもそもそれが我々の現実の意識であるとは思われない。

*17 国内外のポップ音楽にしても、一般にその主人公はごく若い女性や優秀な青年男性であり、地味な中学生男子のための歌というのはごく一部であるように思われる。秋元康がプロデュースするアイドル楽曲が人気を集めているのは、孤独な男子中学生の気分をアイドル女性に歌わせることによってかろうじてその世界を描いているのではないだろうか。

インターネットでのポルノ視聴に関するビッグデータを用いたオーガスたちの研究では、女性も思われているよりも頻繁にポルノ的作品を視聴するのだが、かなりはっきりした性差があるようだ。男性は一般に直接的な視覚的な刺激を好みまたヴァリエティを求めるのに対し、女性は一般に時間的・人間関係的に持続したストーリーを好む。女性的な視点からすれば、男性のポルノ視聴のバラエティ探索は単なる代替可能なモノとみなしているためだと考えられるのかもしれないが、バラエティや数を求める傾向を、無差別ととりちがえている可能性がある。

ジンバルドは、現代ネット社会において、数多くの（モテない／消極的な）男性たちが毎週相当の時間をポルノを探してネットサーフィンして時間と金を浪費していることを危惧している。しかし、代替可能な単なる性的なモノなのであれば、どれでも同じではないだろうか？なぜ彼らは延々サーフするのか？答えは、おそらく、ポルノ的表現にもその対象にも質の違いがあるからである。彼らはよりよい対象、モノを求めてサーフするのであり、その費す時間の巨大さを考えれば、「貶めている」という表現が適切であるか疑問ではないだろうか。視聴者・愛好者は、むしろ、最新のポルノに登場する人物たちの性的な魅力に圧倒され搾取されているとさえ言えるかもしれない。

3.6 男子の苦境？

ファレルやベネター、ジンバルドらは、さまざまな統計や調査を利用して、主流フェミニストの議論に対して、男性の立場から見た場合の男性の不利益の長大なリストを提出している (Farrell, 1993; Sommers, 2000; Soble, 2002; Benatar, 2012; Zimbardo and Coulombe, 2016)。

ここで、われわれの社会では男性一般の不利益とはどんなものか、あるいは男性と女性のどちらが不利か、といったあまり生産的でない問題を考えるつもりはない。むしろ指摘しておきたいのは次の二点である。第一に、たしかに、ポルノや文化全体に対してなされる「モノ化」というフェミニスト的な非難において持ちだされる各論点について、フェミニズムに反感をもつ論者たちが提出する「男だつて女によってモノ化されている」あるいは「男性差別だ」という反論は、瑣末でくだらないように思われるかもしれない。彼らの主張は、せんじつめるところ、モテない男性、あるいは能力において他に劣る男性は、非常に苦しい立場にあり、その苦境は性差別と性暴力に怯える女性たちよりはるかに社会的に不可視化されているのだ、ということになる。しかしこうした反論を我々が軽視することこそ、道徳的な問題を含んでいる恐れがある。

第二に、「我々の社会において女性一般はモノ化され危害を受けている」という主張が、自明でもはや疑う必要がなく、現実を調査する必要などはないと考えられてしまうことの危険性である。たとえばごく最近出版された Mari Mikkola らの *Beyond Speech* を一例にあげれば、この論集はポルノとモノ化の害悪についての分析哲学的な議論が様々に展開されているが、男性のポルノ購買や使用についての統計的な事実、あるいはそうした経験についての調査や分析はほとんど含まれておらず、言及さえされておらず、さらにはフェミニスト的発想に批判的な論者の著作への言及さえ非常に少ない^{*18}。これは非常に危険なことではないだろうか。人々が考えていること、人々が信じていること、人々がそうすべきだと言うことと、社会的規範とされるもの、そうした規範や思想と、人々の生活、人々が実際におこなっていることは別のことである。社会的規範とされているもの（それさえも怪しいが）やポルノが人々の考え方と生活の両方に影響を与えているという点について争うつもりはない。しかし、どのような影響を与えているかは実証的な研究が必要のはずである。

^{*18} これは、この書籍が「分析哲学」の本だからではないように思われる。もっと一般的な人文・社会学系の学者や作家らによる *Everyday Sexism* (Bates, 2014) のような最近のフェミニスト論集においても、個々のアネクドタルな「女性の経験」が語られるが、それを越えた統計的調査、あるいは設計された調査がおこなわれることはめったにない。

3.7 性的な視線は格下げするか？

ヌスバウムは最高レベルの女子テニス選手たちが、その技量にもかわらず男性ファンから性的にのみ見られることを、性的な存在に貶められていると考えた。しかし、単に女性であれば性的に魅力的であるのであれば、別段テニス選手である必要はないだろう。彼女たちは、最高級のテニス選手であるからこそ、ファンにとって性的に魅力的だと考えた方が筋が通っているのではないだろうか。アレン・グッドマンは『スポーツとエロス』で古代ギリシア時代から現在まで、スポーツ選手たちはその身体的均整と運動能力のゆえに常に性的に魅力的な存在ととらえられてきたし、現在もそうであると指摘している。

女性運動選手のエロチックな魅力は、大部分がスポーツそのものにある……彼女たちにみられる特別な魅力は、肉体の動きに無駄があってはならないということから来ている。この美しい動きから、われわれが美の側面と見なしている形が生まれるのである。言い換えれば、性的対象化^(モノ)されていると考えられる女性選手の大きな魅力は、彼女たちの運動選手としての——現在および過去の動きからくるものである。……優れた競技という行為が、タイトの水着ではできないエロチシズムを彼女たちに与えているのである。男性運動選手のエロチックな魅力も、同じように、そのすばらしい動きと身体の鍛え方からくるものであるということを付け加えておく必要があるであろうか。(Guttman, 1996, 邦訳 pp. 187-188)

こうしたスポーツ選手の性的魅力については、最近のオリンピックでフィギュア観戦を楽しんだファンたちには説明する必要はないだろう。そしてガットマンは選手達もそうした魅力に自覚的であるとする。

(フェミニストたちは)メディアは、カタリーナ・ビットを「厳しさとすばらしい競技に対する強い願望をもった、真面目で、スポーツに専念する選手」としてよりも、むしろ「セクシーな女性」として描いていると批判しているが、ビットが……真面目な選手であると同時に(自分の肉体的魅力を十分意識している)セクシーな女性であるということがわかっていないのである。(Guttman, 1996, 邦訳 pp. 194)

我々の性的な文化・ポルノにおいては、女性は受動的自発性をもたないモノと考えられているとされる。この見解の評価は難しい。上のオーガスらの調査や、ロフトスらの調査(Loftus, 2002)では、男性ポルノユーザーの大半は性的に活発で積極的な女性が出演するごく円満なものを好んでいるようである。もちろんかなり特殊なものを好むユーザーもいるだろうが、全体としてはなんらかの個性と自発性が期待されているように思われる。

現代社会では、ポルノだけでなく、少女アイドルのようなあからさまな「性の商品化」をおこなっているショービジネスにおいても、容姿のよさだけではとても成功できないようである。むしろ知性や各種の技術、あるいは特徴あるパーソナリティーが必須であり、そうした「性の商品化」界では女性たちは(そして男性も)、(8)身体に還元されている、あるいは(9)容姿のよさに還元され、非人格的で(3)不活発で(4)代替可能なモノとされているというよりは、むしろ、極度に個別化されパーソナリティーと能力の全体による魅力を評価されているという方が正確であるように思われる*19。「モノ化」という観点から、ポルノとしばしば関係づけられる萌えアニメと呼ばれるジャンルでも、登場人物の個性と自発性は重要であるようだ。むしろ、多数の登場人物を用いる場合はいかにしてその「キャラ」を立てるかが製作者の腕の見せどころであり、現実世界の

*19 女子アナファンたちの存在については前論で指摘した。

人々よりはるかに個性的で活発である。

こうしてみると、「性的モノ化」という視線文化批判は、個別の論点としては重要なものを含むにしても*20、なにかまったくまちがった方向を向いているのではないだろうか。「モノ化」の議論の見かけの説得力は、現実の世界で男性と女性の関係がどうなっているのか、男性がポルノをどう楽しんでいるのか、ということを考えてみるとかなり損なわれてしまうように思われる。モノ化批判の背後には、性的なものそのものに対する根本的な嫌悪感、忌避感があるのではないだろうか。

4 ふたたび暫定的見通し：

モノ化と女性のエンパワとしての「エロティックキャピタル」

性的な魅力については興味深い論点が出てきているので最後にそれを紹介して終わることにする。社会学者のキャサリン・ハキムは、2010年の『エロティック・キャピタル』で、現代社会での性的な魅力の重要性を指摘している(Hakim, 2011)。経済資本(エコノミーキャピタル)、人的資本、文化資本、社会関係資本(ソーシャルキャピタル)などと並び、性的魅力は社会的成功のために重要である。エロティック・キャピタルは、(1)美貌、(2)セックスアピール、(3)快活さ、(4)着こなしのセンス、(5)愛嬌(charm)と社交スキル、(6)セックスの能力などの魅力を総合したもので、生まれつきの要因もあるが、多くは個人の努力の成果でもある。女性は幼少時からそうした魅力を磨く努力をする傾向があるために、一般に男性よりもエロティックキャピタルを多くもつ。また男性は一般に慢性的な性的欲求不満(sexual deficit、セックス欠乏)に悩んでおり、性的関心の差が男女間の不均衡を生んでいる。成功している女性の多くは自分の性的な魅力と男性の関心に自覚的であり、それを使用して男性を支配しているのだと言う。

ハキムは、旧来の男性中心社会、特にアングロサクソン中流階級の文化では、エロティックキャピタルはむしろ強く抑圧されてきたと指摘する。男性中心社会は、性的サービスを売る女性に汚名を着せ、またルックスや性的魅力を重視することは不道德なことであると人々に押しつけている。女性はむしろエロティック・キャピタルを蓄積し、自分たちの性的な魅力を発揮することによって男性より優位に立つことができるとする。近年流行している自撮り(セルフィー)のSNSでの公開、自撮りポルノ、若年層の化粧品に対する関心、美容整形、自己プロデュースによるアイドル化などの文化は、時に若年女性の自己モノ化(self-objectification)として強く懸念されているのだが、人々が性的な魅力の社会的重要性に気づき肯定しつつあることのあらわれかもしれない。人を魅力的なモノと見ることには道徳的に問題があるとする見方を維持しつづけることが正当かどうかは不明である。それ自体にはまったく問題はないかもしれない。

魅力的な存在としての自己モノ化はそれが自発的であれば、実践的には女性の(そして男性にとっても)エンパワメントになるかもしれない。ハキムは次のように言う。

自分のエロティックキャピタルを開拓するのに多少なりとも時間を費やしてきた女性は、次第に男性の扱いに自信を持ち、優しくも意地悪くもできるようになる。社交術はより磨かれ、多種多様な状況や人々に対応できるようになる。……性的な経験を積んだ女性たちは、男性に対する従順さが薄れ、積極性が増し、自己主張が強くなり、セックスにおいても人間関係においても「支配する」立場に慣れていく。その結果、男性優位主義の文化が強く残る社会でさえ、女性たちは自信を深め、男性と平等だという意識を持ち、従順さよりも自主性を重んじるようになる。(邦訳 p.221)

*20 リストの(2)(5)(7)等。

もちろんハキムの研究は基本的には記述的なものであり、彼女の規範的主張を簡単に受け入れるわけにはいかないのだが、女性のモノ化は常に道徳的に不正であるという発想に対する別の視点を提供してくれていることはたしかである。

こうした知見を眺めつつふたたびごく暫定的な結論を述べれば、フェミニストによるモノ化批判の議論は、法的な規制の基盤として使えないだけでなく、道徳的非難の根拠としてもそれだけでは、つまり実際の性暴力とのかかわりなしには不確かなものであり、せいぜい美的な、あるいはマナー的な軽蔑の理由でいどにしかならない。もちろんそうした女性を性的なものとして評価する視線が粗野であったり下品であったりするという理由から、そうした人々を嫌うのももっともかもしれないが、それは道徳的な非難とはまた別種の評価とされるべきであろう。

いずれにしても、(今回根拠を出すことはしないが)現在の国内のフェミニスト主流の性的モノ化・性の商品化批判はイデオロギー化していて、我々の生活や感覚の実態と離れつつあるように思われる。性的な問題について抽象的な思いこみで議論するのは危険であり、現実のわれわれがどんな生活をしているのかを把握しつつ議論することが重要だろう。社会学や心理学、経済学、生物学など広く調査をおこなうべきである。

参考文献

- Barash, David P. and Judith Eve Lipton (2001) *The Myth of Monogamy: Fidelity and Infidelity in Animals and People*: W.H. Freeman and Company, (デヴィッド・バラシュ, ジュディス・リプトン, 『不倫のDNA: ヒトはなぜ浮気をするのか』, 松田和也訳, 青土社, 2001) .
- (2009) *Strange Bedfellows: The Surprising Connection Between Sex, Evolution and Monogamy*: Bellevue Literary Press.
- Bates, Laura ed. (2014) *Everyday Sexism*: Simon & Schuster.
- Benatar, David (2012) *The Second Sexism: Discrimination Against Men and Boys*: Wiley-Blackwell.
- Diamond, Milton (2009) “Pornography, Public Acceptance and Sex Related Crime: A Review,” *International Journal of Law and Psychiatry*, Vol. 32, pp. 304–314.
- Farrell, Warren (1993) *The Myth of Male Power: Why Men are the Disposable Sex*: Berkley.
- Fisher, Helen (2011) “Serial Mongamy and Clandestine Adultery: Evolution and Consequences of the Dual Human Reproduction Strategy,” in Roberts, S. C. ed. *Applied Evolutionary Psychology*: Oxford University Press.
- (2016) *Anatomy of Love: A Natural History of Mating, Marriage, and Why We Stray*: W. W. Norton & Company, 2nd edition, (ヘレン・フィッシャー, 『愛はなぜ終るのか: 結婚・不倫・離婚の自然史』, 吉田利子訳, 草思社, 1993 は第1版の翻訳) .
- Green, Leslie (2000) “Pornographies,” *The Journal of Political Philosophy*, Vol. 8, No. 1, pp. 27–52.
- Guttman, Allen (1996) *The Erotic in Sports*: Columbia University Press, (アレン・グッドマン『スポーツとエロス』, 樋口秀雄訳, 柏書房, 1998) .
- Hakim, Catherine (2011) *Honey Money: The Power of Erotic Capital*: Penguin, (キャサリン・ハキム, 『エロティック・キャピタル: すべてが手に入る自分磨き』, 田口未和訳, 共同通信社, 2012) .
- Haslanger, Sally (2012) *Resisting Reality: Social Construction and Social Critique*: Oxford University Press.
- Hill, Judith M. (1987) “Pornography and Degradation,” *Hypatia*, Vol. 2, Reprinted in Timmons (2007).
- Langton, Rae (2009) *Sexual Solipsism: Philosophical Essays on Pornography and Objectification*: Oxford University Press.

- Loftus, David (2002) *Watching Sex: How Men Really Respond to Pornography*: Thunder's Mouth Press.
- MacKinnon, Catharine A. (1987) *Feminism Unmodified: Discourses on Life and Law*: Harvard University Press, (キャサリン・マッキノン, 『フェミニズムと表現の自由』, 奥田暁子他訳, 明石書店, 1993) .
- (1989) *Toward a Feminist Theory of the State*: Harvard University Press.
- Meston, Cindy M. and David M. Buss (2009) *Why Women Have Sex?*: Macmillan, (シンディ・メストン, デヴィッド・バス, 『なぜ女性はセックスをするのか?』, 高橋佳奈子訳, 講談社, 2012) .
- Miller, Geoffrey (2001) *The Mating Mind: How Sexual Choice Shaped the Evolution of Human Nature*: Anchor Books, (ジェフリー・ミラー『恋人選びの心: 性淘汰と人間性の進化』, 長谷川真理子訳, 岩波書店, 2002) .
- Nussbaum, Martha C. (1995) "Objectification," *Philosophy & Public Affairs*, Vol. 24, No. 4.
- Papadaki, Evangelia (Lina) (2015) "Feminist Perspectives on Objectification," in Zalta, Edward N. ed. *The Stanford Encyclopedia of Philosophy*: Metaphysics Research Lab, Stanford University, winter 2015 edition.
- Russel, Dinna E. H. (1993) *Making Violence Sexy: Feminist Views on Pornography*: Teachers College Press.
- Soble, Alan (2002) *Pornography, Sex and Feminism*: Prometheus Books.
- Sommers, Christina Hoff (2000) *The War Against Boys: How Misguided Feminism is Harming our Young Men*: Simon & Schuster Paperbacks.
- Timmons, Mark ed. (2007) *Disputed Moral Issues: A Reader*: Oxford University Press.
- Zimbardo, Philip and Nikita D. Coulombe (2016) *Man Disconnected: How Technology has Sabotaged What it Means to be Male*: Rider, (フィリップ・ジンバルド、ニキータ・クロン、『男子劣化社会』, 高月園子訳, 昭文社, 2017) .
- 麻生一枝 (2010) 『科学でわかる男と女の心と脳』, ソフトバンク.
- 江口聡 (2006) 「性的モノ化と性の倫理学」, 『現代社会研究』, 第9号, 京都女子大学.
- (2007) 「ポルノグラフィに対する言語行為論アプローチ」, 『現代社会研究科論集』, 第1号, 3月, 京都女子大学.
- (2010) 「ポルノグラフィと憎悪表現」, 北田暁大 (編) 『自由への問い4: 表現』, 岩波書店.
- (2016) 「「ノーはノー」から「イエスがイエス」へ: なぜ性的同意の哲学的分析が必要か」, 『現代社会研究』, 第19号.
- (2017) 「ないものねだりの／いわずもがなの魚住洋一のセックス哲学へのコメント」, 『倫理学論究』, 第4巻, 第1号.
- NHK 「日本人の性」プロジェクト (編) (2002) 『データブック NHK 日本人の性行動・性意識』, NHK 出版.
- 藤田尚志 (2016) 「結婚の形而上学とその脱構築: 契約・所有・個人概念の再検討」, 藤田尚志・宮野真生子 (編) 『愛・性・家族の哲学: 家族』, ナカニシヤ出版.